
おじさん と ボク、ボク と おじさん

a-su

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじさんとボク、ボクとおじさん

【Zコード】

N1632D

【作者名】

a-su

【あらすじ】

不思議なおじさんと、波乱万丈のボクの人生の不思議な話です。
また、おじさんに与えられた役目の意味とは・・・？

もし、黒いタキシードに 黒いハット帽に 壊れている金色の懐中時計をぶら下げて杖を持っている、いかにも男爵っぽい おじさんを見つけたら どうか喋りかけてあげてほしい。
おじさんは、強くて優しい人だけど、根は弱く寂しがりやなんだ。
だから見つけたらどうか喋りかけて友達になつてあげてほしい。ボクみたいに・・・。

もう、ボクは この世には存在しない人間だ。

ボクとおじさんとの出会いは、ボクが小学校2年生の頃だった。おじさんは、ボクがいつも遊んでいた公園の大きな木の下のベンチにいつも同じ服装で杖にもたれて座っている。おじさんは無表情でひたすら子供の遊ぶ姿をみつめていた。そのうち子供の間では不気味がられて当然の「ごとくあだ名が付けられた。おじさんのあだ名は

「死神」だった。それがどんどんエスカレートし、"触つたら死ぬぞ"という子供さえしてきた。それでもおじさんは いつもの場所でいつもいつも子供達を無表情で眺めていた。

ある日、僕達がドッヂボールをしていたらボールが弾みで死神のベンチの下にはいつてしまつた。死神は知つてか知らずか、相変わらず無表情で子供達を眺めていた。僕達はジャンケンでボールを取りに行く役を決める事にした。言つまでもなくボクが負けたのだ。

ボクは死神の方に恐る恐る行き、声を震わせながら言つた

「すいません、ボールが・・・。」

すると死神はベンチの下にあるボールを座つたままでボクに差し出してきた。その時、死神がニコツヽ と微笑んだ。その時はみんな悪魔の微笑みにみえて、いっせいに叫びながら逃げただつた。その夜 ボクは お母さんに頼まれて買い物に行かされる事に

なつた。近くのスーパーに行くには、死神のいる公園の前を通りなくてはならず、あんまり行きたくはなかつたが、お母さんも夜遅くまで働いてくれるため、僕がわがままを言つ事はできなかつたのだ。

そとに出でみると、お月様は、大きな真ん丸い円を描いていた。それは、ほれぼれするぐらいの美しい満月だつた。しかし11月の肌寒い気温がすぐに現実にもどしてくれた。もう夜だし死神もないだろう、と思い、さつさと御使いを終わらそうと思った。そして問題の公園の前を通りかかるとボクの足が凍りついた。まだ死神がいたのだ。

しかし死神は杖にもたれかかつて、うつ伏せになつていた。寝ているのか、と思つたが背中が刻みに動いているので、そうではなさそうだ。耳をすましていると、"シクツ、シクツ"と言ふ声が聞こえた。死神は泣いていたのだつた。ボクの恐怖感は、いつの間にやら消え、おじさんに自ら近寄つていつた。満月の月と、大きな木と、ベンチに座つて月明かりに照らされているおじさんは、凄くいい絵になつっていた。

泣いているおじさんにボクは喋りかけた。

「暁はごめんなさい・・・。」

すると、おじさんは顔をあげて、ボクの方を向いた。

「あ〜、暁の坊やか。何を謝つてるのかね。」

「おじさんを見て逃げた事や、死神とか言つた事・・・。」

すると、おじさんは笑顔になつて言った。

「はつ、はつ、はつ、私のあだ名は死神か〜、残念だが私は死神にすら見捨てられたよ、はつ、はつ、はつ。坊やがそんな事気にする必要はないよ。」と言つて僕の頭をなでてくれた。おじさんの声は太く優しく、頭をなでてくれた手は凄く大きく、ボクの心はなぜか落ち着いた。ボクのお父さんは、ボクが小さい頃に病氣で亡くなつたらしいので、お父さんの記憶はあまりない。なので、おじさんの優しさが凄く居心地良かつたのだ。おじさんを一人占め

したい といふ気持ちからか、次の日学校でも昨晚の事は誰にも話さなかつた。母は毎晩9時くらいに帰つてくるので、それまで毎晚おじさんの居る公園に通いはじめた。そして、学校の事や悩み事や 自分の事を色々と話した。おじさんは なに一つ嫌な顔せず 小2のボクの話を真剣に聞き ボクの悩みを真剣に考えてくれた。父が亡くなり、母がボクを一人で苦労しながら育ててくれる事を話したら、大きくなつたら親孝行してあげなさい、と教えてくれた。

学校の同じクラスの子が好きなんだ、と語つと いろいろアドバイスをしてくれた。

しかも アドバイス通りにしたら 小2ながりつまい事いった。とにかく おじさんは何でも教えてくれたし なんでも知つていた。

話だけではなかつた。おじさんは キヤツチボールやサッカー、手品や色々な事をして遊んでくれた。たぶん周りから見れば 普通の親子に見えていだろ。でも、ボクはそれでも良かつた。

おじさんが お父さんならな と思つ時は何回もあつた。

ボクが小5年生になつた頃 お母さんは 相変わらずボクの学費などのために 色々とがんばつてくれていた。ボクはおじさんの教え通り 親孝行するため毎日 勉強した。そのおかげで成績はクラスでは上方だ。

夜になると、ボクからすれば 良い相談相手であり 父親と、語つても過言ではないくらいの おじさんのいる公園へいく。その日ボクは今まで暗黙の了解でタブー と思つていた おじさん自身の質問を星を眺めながらしてみた。

「おじさんに 質問していい

「おう、なんだね。」

「おじさん、家族は？」

「家族はもういないな~」

おじさん、いつもここで何をしてるの?「

「子供を見ているのや。」

「おじさんは、一体・・・誰？」

「そうだな、坊やが30歳くらいになつたら教えてあげるよ。」

すると星を眺めていた おじさんは、ボクの方を向いて言った。

「君はもう大人になつた。君と過ごした3年間は、凄く楽しくて充実していたよ。でも私がこれ以上いたら 君は成長しなくなるような気がしてね。だから、一旦お別れだ。君が30歳くらいになつて 私の事を覚えてくれたら また会いに来てくれたまえ。」

あまりにも 突然な事だつたが、何故かこうなる事は分かつっていたような気がしていた。しかし ボクは、涙を抑えるのが必死で返す言葉もなかつた。 おじさんは、目頭に溜まつていた涙を そつとふき取つてくれると 立ち上がり、よちよちと歩いていった。それ以来 ボクの前にも、公園にも姿を見せる事はなくなつた。

それから円日は達、ボクは親孝行するため 良い高校に行き、良い大学にもはつて 良い会社に就職した。そして、なんと ボクが小学校の時に好意を寄せていて おじさんのアドバイスで何とかなつた子と結婚もしたのだ。子供も授かり、ボクはそれなりに幸せな家庭を築き、良い人生を歩んでいた。しかし、人間の記憶力というのは、凄く乏しく 月日が流れるにつれて、おじさんとの記憶が薄れてきた。そして、25歳の秋 ボクの唯一の母親が死んだ。母は癌だったが 発覚してもボクに心配かけまいと ずっと黙つて元気な振りをしていたのだった。母はボクがずっと小さい頃から ボクのためにガムシャラに働いていたにで ボクが殺したんだと 自分を責めた事があつたが、母が最後に残した言葉

「強く たくましく生きなさい」 という言葉に助けられた。

でも、それからというもの ボクの人生の歯車は狂い始めてきたの

だ。

27歳の頃 ボクが勤めていた会社の経営が傾き、ボクはリストラにあった。そしてボクは次の就職ができないせいか お酒に手をだしてしまったのだ。妻はそれを見かねて 子供を連れて家をでていった。でも、ボクはそれをとめなかつた。なぜかと言うと ボクも 妻がボクから離れた方が幸せになる事は知つていたからだ。これを母が見ていればなんて言つだらうか。

ボクは身内もいなく 職もない。

人生のどん底があるとしたら、今がそんなんだらうと思つ。しかし、まだ そうではなかつた。

29歳の時 ボクは 相変わらずお酒の力に頼つて、過去を忘れようとしていた。コンビニに武将髭を生やし お酒を買いに行く途中に、いきなり目眩がして倒れ 救急車で運ばれたのだ。病院のベッドで目が覚めたが、周りには誰もいなかつた。そして次の日、診療室に連れていかれ 先生から衝撃の事実が打ち明けられたのだ。

「あなたの 病名は 癌 です。あと3ヶ月、いや半年もつたらいい方でしよう。」

ボクは放心状態だつた。 お母さんの事をかんがえていた。 お母さんが どうしようもない ボクを連れて行く事にしたんだな、と思った。ボクは身内もなく入院しても手術しても 生きていても意味がないような 気がして、そのまま病院を後にした。ボクは夜の繁華街を行くあてもなく、うろちょろしていた。気づいたらボクは大きなビルの屋上にいた。 どうせ3ヶ月で死ぬなら 今死んだ方が 3ヶ月も苦しまなくて済むと思い身を投げる覚悟だつた。

セーフティランスをよじ登り ビルから飛び降りようとした時 上を向いたら 月は真ん丸い満月だつた。 美しかつた。 ボクは 小学校の時を思いだした。 おじさんの事だ。 ボクは自殺を中止し、おじさんのいた公園へ行く事にした。行く途中に、店のショ

ー・ウインドーにボクの姿が映った。

髭が生え、今じゃ可愛かつた小学生の面影は一つもなく、おじさんは
がいても、ボクの事を覚えててくれてるか不安になつた。それで
も、ボクは、おじさんに会いたくて公園まで小走りで走つていつた。
公園に着いた頃はもう夜中の2時だつた。考えてみると、今日は
ボクの誕生日で丁度 30歳になつた。そして、恐る恐る公園を覗
いてみた。

ボクは自分の田を凝つた。満月の田と、大きな木と、田明かりに
照らされてベンチに座つているおじさん、小学2年の時 見た風景
と変わってないのだ。それは美しく一枚の絵のようだつた。た
つた一つ変わつたとすれば、おじさんが泣いていない事だけだ。
ボクはおじさんの方へゆっくりと歩いていつた。おじさんの前で
足を止めると、おじさんがボクの顔の方に 顔をゆっくりと向けて、
ゆっくりと立ち上がつた。そしてボクに尋ねた。

「あの時の坊やかね」

おじさんは、覚えててくれていた。

ボクはゆっくりと うなずくと おじさんはボクをそいつと田明
かりの下で包み込んでくれた。ボクは小学校の時 頭をなでてく
れたみたいな気持ちになつた。凄く心が安心し 病気の事や過去
の事など 全てがどうでもよくなつて子供の頃のよつたな気持ちにな
つた。ボクは涙がでたが、また おじさんがふいてくれて、おじ
さんがいつてくれた。

「苦しかつたな、立派な大人になつたな。」

ボクはなにも言つてないのにおじさんは 何でも知つてるつて感じ
だつた。

その夜、ボクは今までのいきさつをすべてはなした。おじさんは
昔と変わらずボクのはなしを真剣に聞いてくれていた。そして、
あの時の質問をもう一度聞いてみた。

「おじさんは、一体 誰なの?」

おじさんはこう答えた。

「信じるか分からぬが、私は今年でもう254歳になるんじゃよ。私もかつて命を失いかけた事があつて、神様と取引をしての、それが事の始まりじゃ。私が25歳の時、病氣でもう死に掛けていた。そんなんある口、神様が夢にててきての、私にこう言つた。

”命を取りとめたいか。”

私には家族も子供もいたから 迷わず はい と答えた。すると

神様は、

”よろしい、そのかわり お主に条件を出そう。世界中の子供達を幸せにするのじゃ。” そう言つと神様は 金色の懐中時計を渡してきて目がさめたんじゃ。夢かと思つたら手には金色の懐中時計を持つていたんじゃよ。

そういうと、服に掛けていた金色の懐中時計をみしてきた。しかしその懐中時計は動いてなかつた。

「おじさん、この時計壊れてるんじゃない」

「そりなんじや、ゼンマイを巻いても時計屋に修理を頼んでも動かないんじや。そして、神様がいうての、子供を幸せにしろ というのははどういう事かずっと考えてるうちに 気づいたんだが、なぜか、私は死なないんだよ。私は今までの間、自分の愛する人、自分の大切な人、そして最愛の息子達の死を、まのあたりにしてきた。どうして、・・どうして、私は死なないんだっ！！ どうして私は バカな取引をしてしまつたんだっ！！。」

そういうと、おじさんは泣いてしまつた。 そういえば小学校の頃 おじさんが泣いていた理由が今 わかつた。

その後も、おじさんは色々なことを 教えてくれた。

神様との取引のあと なんとなくだが 子供の心が読めたり、子供の将来がよめたりするらしい。 そう いわれるとボクが自殺する事を予知してたかは知らないが、30歳に来い といった理由が説明つく。

ボクは残り少ない預金でお母さんと住んでたアパートを借り、殺風景であつけない部屋だが そこに住みはじめた。

おじさんも、一緒にと誘つたが、おじさんは来なかつた。

それでも毎日 子供の頃みたいに、おじさんの所へ 30歳の大人が遊びに行つた。おじさんと いると心が穏やかになり、なにしろ一緒に居るだけで楽しい。子供の時みたいに キヤツチボールやサッカーとかした。そして一緒に風呂へ行つたり、ご飯をたべたり、ボクの残りの白黒の人生をカラーにしてくれた。しかしボクの体力は徐々におとろえ、ついに、おじさんに会いに行く途中で倒れて、また救急車で運ばれてしまった。

ボクは思つて いる以上に体力が衰えて いつ死んでもおかしくない状態だつたとおもう。

ボクはゆっくりと目を開けた。ここは病院のベッドみたいだ。周りをゆっくり見回すと、おじさんがいた。ずっと、ボクのそばにいてくれたんだ。

おじさんは、ボクの方を向いて ニコッ と微笑んだ。ボクも体に力が入らなかつたが、懇親の力を振り絞つて 微笑んだ。外をみると雪がふつっていた。

ボクはおじさんに最後の質問をした。

「ボクつて死ぬんでしょ？」

おじさんは、ボクの手を取り 顔を引きずりながら微笑み、軽く一回うなずいて 語りだした。

「私は今まで、人との別れが怖くて 人と関わるのを避けていた。しかし、それは過ちだと君が教えてた。そして神様が与えてくれた すばらしい役目も君のおかげで気づいたよ。私はこの先何年生きるか分からないうが、君の事は 忘れない。」

ボクは、おじさんの涙を、親指で取つてあげた。おじさんはボクの手を取り 布団の中に収めて、愛用の杖をもつて病室からでていつた。

その数秒後 病室の扉が開いた。

妻と子供だつた。妻はボクの胸元で泣いてくれた。ボクは今から死に行くのに、子供の顔も見れてなんだか幸せな気分だつた。

今なら お母さんに胸を張つて会いに逝けそつだ。
ゼントありがとう。 おじさん。

享年 30歳

2005年 12月25日没

もし、黒いタキシードに 黒いハット帽に 力いっぱい動いてる金色の懐中時計を ぶら下げ、杖を持つている いかにも男爵っぽいおじさんを見かけたら どうか喋りかけてあげてほしい。
おじさんは、強く優しい人だけど、根は弱く寂しがりやなんだ。
だから見かけたら喋りかけて 友達になつてあげてほしい。

ボク以上に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1632d/>

おじさん と ボク、ボク と おじさん

2010年10月19日03時32分発行